

# まるさす人口論要領

法學博士 河上肇

## 一、序言

- 二、人口論第一版要領——(一)人口論ノ前提
- 三、人口論第一版要領——(二)人口増加ノ妨グ
- 四、人口論第一版要領——(三)所謂「人口ノ原則」
- 五、人口論第一版要領——(四)人口増加ト社會ノ改良
- 六、第一版ト第二版トノ差異——(一)總説
- 七、第一版ト第二版トノ差異——(二)議論ノ比較
- 八、第一版ト第二版トノ差異——(三)道德的抑制
- 九、第一版ト第二版トノ差異——(四)立脚地ノ變化
- 一〇、第二版以下第六版
- 一一、まるさす人口論ノ學問上ノ地位

## 一 序 言

一、嘗テばーなーハまるさすヲ讀マズシテ之ヲ批評スル者多キヲ概シ、其著『まるさす及ビ氏ノ著作』ニ於イテ次ノ如ク述ベタコトガアル。

『或著者が一旦に「そりち」ニ爲ルト、其著書ハ往々ニシテ讀マレナク爲ル、ソウシテ其人ノ學說ハ、通貨ノ如ク使用ニ從ツテ次第ニ磨滅シ、終ニハ發行者ノ附ケタ彫像モ刻印モ明白ニ分ラナク爲ツテ來ル。……あだむ・すみすハ凡テノ人が買メテ

何人モ讀マヌ本ヲ遺シタト云ヒ得ラルルガ、之ト同様ニ、まるさすハ何人モ讀マヌガ而カモ凡テノ人が寫ル本ヲ遺シタト云ヒ得ラルル<sup>(1)</sup>。

又べつたに「まるさす人口論ノ翻刻ニ附シタル序説ノ冒頭ニ於イテ次ノ如ク述ベテ居ル。

『まるさすノ人口論及ビまるさす説ヲ非難スル多數ノ人々ノ中、此書ヲ讀ミタル者、又ハ其著者ノ生涯及ビ性格ニ就キ何等カノ智識ヲ有セル者ハ、極メテ偉カデアルト斷言シテモ、萬々間違ハ無イ。云々』<sup>(2)</sup>。

兩氏ノ言ハ決シテ誇張ニ非ズ。今まるさすノ生涯及ビ性格ニ就イテハ別項内田博士ノ論文ニ委シ。而シテ此拙稿ノ目的ハ只まるさす人口論ノ要領ヲ述ブルニ在ル。遡リテまるさす以前ノ人口論ヨリ説キ起ス餘力ナキヲ遺憾トスレドモ、まるさす以後ノ人口論ニ至ツテハ、幸ニシテ別項米田庄太郎氏ノ論文ニ委シケレバ、余ハ安ンジテ凡テ之ヲ本篇ヨリ省略シ得ル。

## 二 人口論第一版要領 (一) 人口論ノ前提

二、まるさすノ人口論ハ氏ノ生時ニ第六版マデ發行サレタノデアルガ、各版トモ多少ノ差異カアリ<sup>(註)</sup>、殊ニ第一版ト第二版トノ間ニハ重要ナル相違ガアルカラ、一纏メニシテ其要領ヲ述ブルコトハ困難デアル。仍テ茲ニハ先ヅ第一版ノコトカラ述ベル。

(註) 例ヘバ第一版ハ約五萬言カラ成立ツテ居ルノニ、第二版デハ其ガ約二十萬言ニ殖エ、最後ノ第六版デハ二十五萬言ニナツテ居ル<sup>(3)</sup>。猶其他ノコトハ嘗テ拙稿「まるさす人口論初版以下各版ノ差異」<sup>(4)</sup>中ニ述ベテ置イタガ、其中ノ主ナル部分ハ、後ニ必安ニ應ジ、多少ノ重複ナ賦ハズ、本篇ニ於イテ重テ之ヲ記載スルデ有ラウ。

人口論ノ第一版ハ匿名ノ著述デ一七九八年ニ出版サレ、序文ニハ同年六月七日ノ日附ガアリ、其扉ニハ次ノ如ク題シテアル。

1) Bonar, Malthus and his Work, 1885, pp. 2, 3.  
2) Bettany, Introduction to 'An Essay on the Principle of Population.'  
(Ward, Lock & Co's ed.) P. V.

AN

ESSAY

ON THE

PRINCIPLE OF POPULATION,

AS IT AFFECTS

THE FUTURE IMPROVEMENT OF SOCIETY.

WITH REMARKS

ON THE SPECULATIONS OF MR. GODWIN,

M. CONDORCET,

AND OTHER WRITERS.

LONDON :

PRINTED FOR J. JOHNSON, IN ST. PAUL'S  
CHURCH-YARD.

1798.

原  
本  
ノ  
紙  
幅  
ハ  
曲  
尺  
ニ  
テ  
横  
四  
寸  
二  
分  
、  
縦  
六  
寸  
九  
分  
ナ  
リ  
。  
大  
體  
寫  
大  
。  
但  
ハ  
輪  
郭  
ハ  
印  
刷  
ノ  
便  
宜  
上  
假  
ニ  
附  
テ  
ハ  
ナ  
リ  
。

此扉ノ標題ヲ翻譯スレバ『人口ノ原則ニ關スル一論。ソガ社會將來ノ改良ニ及ボス影響。附リ  
じどゐん氏、こんどるせー氏、及ビ其他ノ著作家ノ思索ニ關スル評論』ト云フ意味ニ爲ル。今斯  
カル標題ノ下ニ氏ハ果シテ如何ナルコトヲ論ジタカ。以下余ハ順序ヲ追フテ其大要ヲ述ベル積リ  
デアアル。

## 二 人口論第一版要領 (一) 人口論ノ前提

三、第一ニ、標題中人口ノ原則ニ關スル一論ト云フ部分ニ相當スル議論ヲバ、氏自身ノ言葉ニ  
依リテ之ガ要點ヲ抄録センニ、先ヅ最初ニハ次ノ如クデアアル。

『余ハ正當ニ二個ノ前提ヲ作り得ト考フ。

『第一ハ、食物ハ人ノ生存ニ必要ナリト云フコトデアアル。

『第二ハ、両性間ノ情慾ハ必要ニシテ且略ボ其現狀ヲ維持スベシト云フコトデアアル。

『是等二個ノ法則ハ、人類ノ歴史アツテコノカタ常ニ吾々ノ天性ニ關スル固定ノ法則ナリシガ  
如ク見ユル。而シテ吾々ハ今日マデ是等ノ法則ノ上ニ何等ノ變化ヲ見ザリシガ故ニ、吾々ハ、是  
等ノ法則ガ將來ニ於イテ今日在ルガママノモノデ無クナルデ有ラウト云フコトヲバ……結論ス  
ルノ權利ヲ有タヌ者デアアル。

『余ハ曾フ如何ナル學者モ、此地上ニ於イテ人が遂ニ食物ナクシテ生活シ得ルニ至ルノ日アル  
ベシト豫想セシ者アルヲ知ラヌ。只じどゐん氏ノ如キハ、両性間ノ情慾ヲ以テ將來或ハ絶滅スル

コト有ルベシト推測シテ居ル。……乍併、兩性間ノ情慾ハ、絶滅ノ方向ニ向ツテハ從來何等ノ進歩ヲモ示シテ居ラヌノデ、現ニ今日ニ於イテモ二千年前乃至四千年前ニ於ケルト同一ノ力ヲ以テ存續シ居ルガ如ク思ハル。個人的ノ例外ハ昔カラ常ニ在ルヤウニ今モ在ル。併シ是等ノ例外ハ別ニ其數ヲ増加スルラシクモ無イカラ、單ニ此ノ如キ例外ガ在ルカヲ云ツテ、將來是等ノ例外ガ原則ニナツテ、今日ノ原則ガ例外ニナルヤウニ論ズルノハ、慥ニ甚シク非哲學的ナ議論ノ仕方デアルト謂ハネバ爲ラス。

『ソコデ姑ク余ガ前提ヲ眞ナリトセバ、余ハ次ノ如ク云フ。曰ク、人口（繁殖）ノ力ハ土地ガ生活資料ヲ生産スル力ヨリモ遙ニ大ナルモノデアル。

『人口ハ、若シ制限ナクンバ、<sup>(5)</sup>幾何的の比例ヲ以テ増加スレドモ、生活資料ハ算術的の比例ヲ以テ増加スルニ止ル。……』

(註一)『制限ナクンバ』ト云フ文字ヲ看過シテハ爲ラス。まるさすノ意見ニ依レバ、如何ナル時代如何ナル社會ニ於イテモ、人口ノ増加力ハ常ニ多少ノ制限ヲ受ケザルハ無イト云フノデアルカラ、實際ノ人口統計ヲ引イテ來テ、此點ニ關スルまるさすノ意見ヲ非難スルノハ不當デアル。

四、此ノ最後ニ掲ゲラレタ命題、即チ人口ノ繁殖力ト生活資料ノ増加力トガ同ジ強サヲ有ツテ居ラヌト云フ此命題ハ、まるさす人口論ノ根本の出發點ト爲ツテ居ルモノデアルガ、之ハ殆ド獨斷的ニ立テラレタ命題デアル。まるさす自身ハ以上引用セシ所ニ依ツテ明カナルガ如ク、此命題ヲ以テ先ニ述ベタ二個ノ前提、即チ人間ノ生存ニハ食物ガ必要ダト云フコトト、人間ノ性慾ハ衰ヘヌモノダト云フコトト、此二個ノ前提ヨリ當然ニ出デ來ルモノノ如ク説イテ居ルケレドモ、其ハ

5) 1 ed., pp. 11-14.  
6) 此事ハ後ニ説ク

間違デアル。

學者ニ依ツテハ、まるさすガ食物増加ノ速度ノ緩漫ナコトヲ主張シタノハ、收獲遞減ノ法則ヲ根據ト爲シタルモノナリト論ジ居ル者モアル<sup>(7)</sup>。併シ此法則ハまるさすノ人口論初版が出テカラ十六年目即チ一八一五年ニまるさすトウニスズトガ殆ド同時ニ發見シタルモノニテ、此ノ如キ法則ガ人口論初版ニ論ジテアル譯デハ決シテ無イ。此事ハ嘗テ拙稿『收益遞減法則ノ發見及ビ改造』<sup>(8)</sup>中ニ詳論シ置キタレバ、茲ニハ其仔細ヲ略スル。

食物増加ノ速度ガ何故緩漫デアるか、其ニ就イテハ上述ノ如クまるさすハ何等ノ理由ヲ擧ゲテ居ラヌノデアるか、然ラバ人口増加ノ速度ハ何故急激ナリト見タリヤト云フニ、其理由ハ先キニ掲ゲシ引用文ニ依ツテモ明カナルガ如ク、両性間ノ情慾ハ不變ニシテ衰ヘズト云フコトデアル。先キニ引用シタル所ハ初版ノ第一章ナレドモ、第七章中ニモ左ノ如キ文句ガアル。

『両性間ノ情慾ハ各時代ヲ通ジ殆ド同一ニシテ、從ツテ之ヲ幾何學的ニ言表ハサバ、常ニ一定量 (a given quantity) ノモノナリト考ヘ得ベキガ如ク見ユル。……』<sup>(9)</sup>

此ノ如ク The passion between the sexes (直譯スレバ『両性間ノ情慾』、意譯スレバ『色慾』)ハ各時代ヲ通ジ一定不變ナルガ故ニ、人口ノ増殖力モ亦タ各時代ヲ通ジ一定不變ナリト見タノデアル。人間ノ色慾ハナカナカニ強イカラ<sup>(註)</sup>、從ツテ人口ノ増殖力モナカナカニ強イモノデアルト見タノデアル<sup>(註)</sup>。

7) Oppenheimer, Das Bevölkerungsgesetz des Th. R. Malthus, 1900, S. 18, 19. — Budge, Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz, 1912, S. 16, 17. — Haney, History of Economic Thought, 1911, pp. 199, 200.  
8) 經濟論叢第一卷(第一號)カ一七二頁  
9)

(註一)色慾ハ人間ノ慾望中ナカナカニ強イモノダト云フ考ハ、後ノ版マデ續イテ居ル。例ヘバ第六版ニモ次ノ如キ文句ガアル。  
『食物ニ對スル慾望ニ次イテ、吾々ノ慾望中最モ有力ニシテ且ツ一般的ノモノハ廣キ意味ニ於ケル而シテ、情慾デアアル。』<sup>(10)</sup>

(註二)ぶれんたのーカネをマサノ the passion between the sexes ナ解シテ Fortpflanzungstrieb ト爲シタルハ、誤解又ハ誤譯ナラズヤト思ハル。參考ノ爲メ關係アル部分ヲ抄録スレバ、ぶれんたのーノ文章ハ次ノ如クナツテ居ル。

Was ist die Ursache dieses Zutriebslebens der wirklichen hinter der möglichen Zunahme?

Bei Beantwortung dieser Frage stossen wir auf den zweiten Fehler des Malthus. Es ist dies ein Fehler in psychologischer Beziehung. Malthus nimmt an,

1. es gebe einen Fortpflanzungstrieb, der Ursache der Vermehrung des Menschenschlechts sei, und

2. dass dieser Fortpflanzungstrieb sich gleich bleibe.<sup>(11)</sup>

五、之ヲ要スルニ、まるさすハ、人間ノ生存ニハ食慾ノ満足ガ必要ナルト見タ。又人間ノ色慾ハ、食慾ヲ除カバ、各種ノ慾望中最モ強キモノナリト見タ。サウシテ是等ノ事實カラ必然的ニ出テ來ル結論デハナイケレドモ——而カモ氏自身ハ必然的ニ出テ來ル結論ナルガ如ク論ジツツ——色慾満足ノ結果タル人間ノ出產ト云フ事ト、食慾満足ノ前提タル食物ノ生産ト云フ事トラ比較シテ、前者ノ増加力ハ後者ノ増加力ヨリモ遙ニ強イト考ヘタノデアアル。猶此考ガまるさす人口論ノ根本の出發點ナルコトハ前ニ一言シタル所ナレドモ、此點ニ就イテハ學者間ニ多少ノ異論モアレバ、少ク説明ヲ加ヘテ置ク必要ガアル。

人口ノ増加力ト食後ノ増加力トガ同ジ強サデ無イト云フコトハ、初版以下第六版ニ至ルマデ凡テヲ貫通シテまるさす人口論ノ根本の出發點ト爲レルモノデ、其事ハまるさす自身ノ次ノ言葉デ分ル。

(10) 6 ed., Vol. II., p. 26r.

(11) Brentano, Die Malthussche Lehre und die Bevölkerungsbewegung der letzten Dezennien. 1909. S. 579.

『増加ノ比例ノ相違セリト云フコト(人口増加ノ比例ト食物増加ノ比例トが相違セリト云フ意味、其事ノ上ニ余ガ主タル結論ハ本キ居ル次第ナルガ……』<sup>(12)</sup>

『余ニ向ツテ提起サレタル第二ノ有力ナル反對ハ、余ガ貧民ノ生存權ヲ否認スト云フコトデア  
ル。

人若シ此反對ヲバ多少ニテモ一貫シテ維持セントスルナラバ、余ガ人口論ノ冒頭ニ於イテ樹立セント試ミシ事實、即チ人口ト食物トノ増加ノ比例ハ相違スルモノナリト云フコトガ、根本的ニ誤謬ナルコトヲ説明スル責任ガアル。何故トナラバ、此事實ニシテ眞ナリト假定センカ、余ガ結論ハ避クベカラザルガ故ニ。……』<sup>(13)</sup>

『地球上ノ產物ガ絶對的ニ無限ナルコトヲ認ムトモ、其事ハ、人口ト食物トノ増加ノ比例ガ相違スト云フコトニ全然立脚スル所ノ余ノ議論ヨリ、一毫ト雖モ其ノ重サヲ減ズルモノデハ無  
イ。……』<sup>(14)</sup>

之ニ依ツテ見レバ、人口増加ノ力ガ食物増加ノ力ヨリ強イト云フコトガ、まるさす人口論ノ根本的出發點タルコトハ疑ヒナイ。併シ氏ガ、人口ハ若シ制限ナクンバ幾何的比例ヲ以テ増加シ、食物ハ算術的比例ヲ以テ増加スルニ過ギズト云ヒシハ、一者ノ増加力ノ相違スルコトヲ明瞭ニ言ヒ表ハスコトガ主デアツテ、其ノ或ハ幾何的比例ト云ヒ或ハ算術的比例ト云フガ如キ數量的ノ比較ハ、既ニせー・えす・みる 及ビをつへんはいまー等ノ論ジタ如ク<sup>(註二)</sup>、必シモ其ノ重キヲ置イタ所デハアルマイ。

12) 3 ed., Appendix, p. 517.

13) 3 ed., Appendix, p. 519.

14) 6 ed., pp. 252, 253.

(註一) 參考ノ爲スミルノ所説ヲ抄録スレバ次ノ如シ。

Some.....have achieved an easy victory over a passing remark of Mr. Malthus, hazarded chiefly by way of illustration, that the increase of food may perhaps be assumed to take place in an arithmetic ratios, while population increases in a geometrical: when every candid reader knows that Mr. Malthus laid no stress on this unlucky attempt to give numerical precision to things which do not admit of it, and every person capable of reasoning must see that it is wholly superfluous to his argument.<sup>(15)</sup>

れづくんはいま一モ次ノ如ク略ガ同様ノコトヲ述ベテ居ル。

Erstens wollen wir keinerlei Gewicht auf die bekannte Darstellung legen, dass die Bevölkerung in geometrischen, die Subsistenzmittel aber nur in arithmetischen Verhältnis zu wachsen tendieren. Malthus selber hat darauf anscheinend keinen besonderen Wert gelegt. Es war bei ihm mehr ein Zahlenbeispiel zur besseren Illustration seines Hauptsatzes, als eine festgewordene quantitative Schätzung.<sup>(16)</sup>

之ニ依リテ見レバ、算術的比例又ハ幾何的比例ト云フガ如キ數量ノ比較ハ、みるニ從ヘバまるさすハ laid no stress デアリ、れづくんはいまニ從ヘバ hat darauf anscheinend keinen besonderen Wert gelegt デアルト云フノデアルガ、コト云ツテハ或ハ少シ言ヒ過ギデアリ、少クトモ誤解ヲ生ズル虞ガアル。コレ即チきやなんノ異説アル所以ニシテ、現ニ氏ハ此點ニ關シ次ノ如ク述ベテ居ル。曰ク

It is sometimes alleged that Malthus attached little or no importance to his geometrical and arithmetical ratios.

There is no foundation whatever for this statement.....Beyond the arithmetical ratio theory there is nothing whatever in the *Essay* to show why subsistence for man should not increase as fast as an "unchecked" population.<sup>(17)</sup>

きやなんノ云ヘルガ如ク、何故人口ノ増加力ハ食物ノ増加力ヨリ強大デアルカト云フコトニ就イテハ、まるさすハ凡ハ人口ハ若シ制限ナクバ幾何的比例ヲ以テ増加スルニ反シ、食物ハ算術的比例ヲ以テ増加スルニ過ぎズト云フコトヲ以テ其理由トシテ居ルガケデアル。併シ一歩ヲ進ヌテ何故食物ハ算術的比例ヲ以テ増加スルニ過ぎヌカト云フコトニ就イテハ、まるさすハ何等ノ説明ヲシテ居ラヌノデアルカハ、之ハ單絶ニ臆斷デアツテ、きやなんノ云フガ如ク arithmetic ratio theory ナドト稱スベキ程ノモノデハ無イ。

15) J. S. Mill, Principles, People's ed., p. 217, a.  
16) Oppenheimer, a. a. O., S. 15.  
17) Cannan, *Ibid.*, pp. 143, 144.

畢竟スルニまゐるさすが食物ノ増加力ヲ以テ人口ノ増加力ニ及バズト主張セシハ、單純ナル獨斷ニ本ク。而シテ氏ガ二者ノ増加力ノ強サニ差異アルコトヲ以テ其人口論ノ出發點ト爲セシハ勿論疑ヒナケレドモ、而カモ一方ハ幾何的比列ヲ以テ増加シ他方ハ算術的比列ヲ以テ増加スルニ過ギズト云フガ如クニ、其増加力ノ差異ヲ、數量的ニ言ヒ表ハセシ點ハ、余ヲ以テ見レバ、氏ノ必シモ重キヲ置キ所ニ非ズト信ズル。

### 三 人口論第一版要領(三)人口増加ノ妨ゲ

六、以上述べブルガ如ク、人口ノ繁殖力ト生活資料ノ増加力トガ同ジ強サヲ有ツテ居ラスト云フコトハ、まゐるさすが獨斷的ニ決メタ命題デアアルガ、此命題カラ彼ハ如何ナルコトヲ論ジ出シタカト云フニ、茲ニモ亦まゐるさす自身ノ言葉ヲ引イテ其大要ヲ示サバ、即チ次ニ掲グルガ如クデアアル。

『人間ノ生活ニハ是非食物ガ必要デアアル、之ハ吾々ノ天性ニ關スル一ノ法則デアアル、而シテ此法則ノ爲ニ是等二個ノ不同ナル力(人口増加力ト食物増加力トヲ指ス)ノ結果ハ平等ニ保タレナケレバ爲ラヌ。』  
『此事ハ、生活資料(發得)ノ困難ヨリシテ、人口(増加)ノ上ニ、強クシテ且絶エズ働ク所ノ妨ゲアルコトヲ意味スル。此困難ハ何所カニ落チテ來ネバ爲ラヌ、ソウシテ必然的ニ人類ノ大多數ニ依リテ烈シク感ゼラレキバ爲ラヌ。』

『現ニ動物界及ビ植物界ヲ通ジテ、自然ハ生命ノ種子ヲバ極メテ豊富且自由ニ振蒔ク。只自然ハ其等ノモノヲ育ジニ必要ナル場所ト食物トヲ割合ニ吝ム。若シ此地上ニ含まルル生命ノ種子ニ向ツテ、充分ナル食物ト繁殖ニ必要ナル充分ノ場所トヲ與フルナラバ、數千年ヲ經ル間ニハ百萬ノ世界モ凡テ生物ヲ以テ充塞サルルニ至ルデ有ラウ。一切ヲ支配スル所ノモノニシテ吾等ノ如何ト

モスベカラザル自然ノ法則タル彼ノ必然ナルモノガ、是等ノ生物ヲバ豫定サレタル範圍ノ内ニ制限スル。カクテ植物モ動物モ其繁殖ハ此ノ制限的ノ大法則ノ下ニ萎縮シテ仕舞フ。而シテ人間ト云フ生物モ亦如何ニ其理性ヲ働カストモ、到底此法則ヨリ遁レ能ハザルモノデアル。其結果ハ、動植物ノ間ニ在ツテハ種子ノ浪費、疾病及ビ天死ト爲リ、人類ニ在ツテハ貧窮及ビ罪惡ト爲ル。前者即チ貧窮ハ、其ノ絶對的必然的ノ結果デアル。又罪惡ハ最モ可能的ノ結果デアリ、從ツテ吾モハ現ニ其ノ甚シク廣ク行ハレツツアルヲ見ルト雖モ、併シ恐ラクハ、絶對的ノ結果ト謂フベキモノデハアルマイ。道德上ノ苦節ハ罪惡ニ對スル凡テノ誘惑ニ反抗スルコトニ在ル。<sup>(17a)</sup>

七、此貧窮及ビ罪惡ガ即チまるさすノ所謂人口増加ノ妨ゲ (check) ナルモノデアル。今此點ニ關シ更ニ其議論ノ仔細ヲ紹介スレバ次ノ如クデアル。

『土地ノ生産ニハ決シテ何等ノ制限モ置カレテハ居ナイ。ソハ何時マデモ増加シ、或ル限定サレタル分量ヨリハ何時モ大キクナリ得ベキモノデアル。乍併、人口(繁殖)ノ力ハ猶之ニモ優ル有力ナル力ナルガ爲ニ、人類ノ増加ハ、必然テフ強キ法則ガ其ノ優レル力ニ對スル妨ゲ (check) トシテ絶エズ働クコトニ依リ、始メテ生活資料ノ増加ト調和ヲ保チ得ルコトニ爲ル。』

『以下此ノ妨ゲノ作用ニ就イテ研究スルデ有ラウ。』

『植物及ビ動物ニ在ツテハ、此問題ノ觀察ハ極メテ簡單デアル。彼等ハ凡テ彼等ノ種屬ヲ増加セントスル強力ナル本能ニ依ツテ支配サレテ居ル。ソウシテ此本能ハ、理性ノ働キノ爲ニ、又ハ子孫ニ向ツテ生活資料ヲ供給シ得ルヤ否ヤト云フ疑惑ノ爲ニ妨害サレルコトハ無イ。ソレ故、餘地

ノアル所ニハ何時デモ其増殖力ガ發揮セラレル。サウシテ餘分ニ出來タダケノモノハ後カラシテ、或ハ場所及ビ食料ノ缺乏ニ依リテ(之ハ動物及ビ植物ニ共通デアアル)、或ハ動物ニ在ツテハ他ノ者ノ餌ト爲ルコトニ依リテ抑壓サレテ仕舞フ。

『此ノ妨ゲナルモノノ人ニ及ボス影響ハ一層複雑デアアル。』

『人間モ亦同ジャウニ強力ナル本能ニ依ツテ其種屬ノ増殖ヲ強キラレテ居ルケレドモ、理性ト云フモノガアツテ其行程ヲ妨ゲ、生活資料ヲ供給スルコトモ出來ヌノニ無暗ニ子ヲ産ンデ宜イモノカト云フ事ヲ考ヘサセラレルコトニ爲ル。……』

『此ノ如キ考ヨリシテ、凡テノ文明國民ニ於ケル大多數ノ人々ハ、一人ノ婦人ト早く同棲スルト云フ自然ノ指圖ニ従フコトカラ妨ゲラレル等デアリ、又實際妨ゲラレテ居ル。而シテ此抑制ハ、絶對的ニデハナイガ、殆ド必然的ニ、罪惡ヲ作り出スコトニ爲ル。併シ凡テノ社會ニ於イテ、縦ヒ最モ放埒ナ人々ニ在ツテモ、道德ノ許ス同棲ヲシタイト云フ傾向ガ非常ニ強キカラシテ、ドウシテモ人口増加ニ對シ絶エザル動力ガ存スルコトニ爲ル。此ノ絶エザル動力ハ同ジャウニ絶エズ社會下級ノ人々ヲバ困窮ニ陥レル傾向ヲ有シ、從ツテ彼等ノ状態ニ關スル永久的ノ大改良ヲバ凡テ妨グルモノデアアル。』<sup>18)</sup>

カクテまるさすハ人口論第七章ノ終リニ其所論ヲ要約シテ次ノ三命題ヲ掲ゲテ居ル。

『人口ノ増加ハ必然的ニ生活資料ニ依リテ制限セラルト云フコト。』

『人口ハ生活資料ニシテ増加スル時ハ何時デモ増加スルト云フコト。』

18) 1st ed., pp. 27, 28, 29.

「人口(増加)ノ優レル方ハ貧窮及ビ罪惡ニ依ツテ抑制セラレ、之ニ依ツテ現實ノ人口ハ生活資料ト平均ヲ保ツト云フコト。<sup>(19)</sup>

#### 四 人口論第一版要領(三)所謂「人口ノ原則」

八、以上がまるさすガ其著書ノ標題ノ第一段ニ「人口ノ原則ニ關スル一論」ト題シタ部分ノ議論ノ骨子デアアル。今重テ其要領ヲ摘マバ、吾々ハ之ヲ次ノ數言ニ約シ得ル。曰ク、人口ノ増加力ハ食物ノ増加力ヨリ強大デアアル、故ニ人間ハ常ニ生活資料ノ不足ヲ感ゼザルヲ得ヌ、從ツテ貧窮ト云フ現象ハ人類社會ヨリ絶對的ニ根絶シ得ベカラザルモノデアリ、罪惡モ亦タ容易ニ絶滅シ難イモノデアアル。之がまるさすノ所謂人口ノ原則ナルモノノ要領デアアル。

猶「人口ノ原則」(the principle of population)ナル言葉ハ、きやなんノ説ニ據レバ、<sup>(20)</sup>「政治上ノ正義」中ノ用語ヨリ出タモノデアラウト云フコトデアアルガ、其ノ<sup>(21)</sup>じごゐんノ文句ナルモノハ次ノ如クデアアル。

「人類社會ニハ一ノ原則(a principle)ガアツテ、其ニ依ツテ人口ハ絶エズ生活資料ノ平準ニマデ引キ抑ヘラレテ居ルモノデアアル。例ヘバ亞米利加及ビ亞細亞ノ<sup>(21)</sup><sub>19</sub> 街徳の種族ノ間ニ於イテハ、何年經ツテモ人口ガ増加シテ土地ノ耕作ヲ必要ナラシムルガ如キコトハ無イ。」

まるさすハ余ガ茲ニ掲ゲタ上記ノ文句全部ヲ引キ、且之ニ引續イテ

「此原則タル、じごゐん氏ハ之ヲ以テ不明ニシテ且不可思議ナル或ル原因ノ如クニ考ヘ、之ニ

19) 1st ed., pp. 140, 141. ナホ第二章ノ終リ (pp. 37, 38.) チモ參照ノコト

20) Cannan, *Ibid.*, p. 134.

21) Godwin, *Political Justice*, 1793, p. 813, Bk. VIII. chap. II. (1842 年版ハ異ル)

就イテ毫モ研究ヲ試ミテ居ナイノデアルガ、コレコン貧窮及ビ貧窮ニ對スル恐怖ヲ生ム所ノ恐  
ルベキ必然ノ法則ナノデアル』<sup>(22)</sup>

ト述ベテ居ル。更ニ又同章ノ中程ニ於イテモ、先キニ掲ゲタごどゐんノ『人類社會ニハ一ノ原則  
ガアツテ、其ニ依ツテ人口ハ絶エズ生活資料ノ平準ニマデ引キ抑ヘラレテ居ルモノデアル』ト云  
フ言葉ヲ再ビ引用シ、之ニ引續キテ

『唯一ノ問題ハ、此原則ナルモノハ抑々何デアルカト云フコトデアル。ソハ果シテ不明ニシテ  
且不可思議ナル或原因デアルカ。ソハ果シテ天ノ或神秘的ナル干涉ニシテ、之ガ爲メ一定ノ時  
代ニ於イテ、或ハ男子ガ腎虛ニナリ或ハ女子ガ不妊ニナルト云フガ如キモノデアルカ。其トモ  
又、ソハ吾々ノ觀察ノ範圍内ノモノデ吾々ノ研究ニ向ツテ公開サレテ居リ、縱ヒ其力ニ強弱ハ  
アツテモ人間ノ住ム凡テノ國ニ於イテ絶エズ働キツ、アルモノト看做サレテ居ル原因デアル  
カ。其ガ問題デアルノデアル』<sup>(23)</sup>  
ト論ジテ居ル。

まるさすハ其人口論ノ初版ニ於イテモ『人口ノ原則』ナル語ヲバ所々ニ用ヒテ居ルノミナラズ、  
此語ヲバ多少違ツタ意味ニ用ヒタ所モアルガ、併シ以上引用シタル所ニ依ツテ見レバ、氏ノ用ヒシ  
『人口ノ原則』ナル語ハ恐ラクごどゐんノ用例ニ本クモノニテ、且其意味ハ『人口ヲバ絶エズ其生  
活資料ノ平準ニマデ引キ抑ユル』働キヲ爲ス所ノ一ノ原則ト云フ位ニ解釋スベキモノト考ヘラレ  
ルノデアル。

22) Ist ed., p. 176.

23) Ist ed., pp. 193, 194.

24) 例ヘバ Ist ed., pp. 365, 366, 394.

25) Fetter, Versuch einer Bevölkerungslehre ausgehend von einer Kritik des Malthus'schen Bevölkerungsprinzips, 1894. S. 15-18. 參照

## 五 人口論第一版要領(四)人口増加ト社會ノ改良

九、既に述べし如ク、人口論第一版ノ標題ハ、第一段ガ「人口ノ原則ニ關スル一論」トシテアリ、第二段ハ「ソガ社會將來ノ改良ニ及ボス影響」トシテアツテ、最後ニ「附リ、ごどゐん氏、こんどるせー氏、及ビ其他ノ著作家ノ思索ニ關スル評論」トシテアル。而シテ此標題ノ第一段ニ相當スル部分ノ議論ノ骨子ハ以上ヲ以テ大略述べ了へタルガ故ニ、之ヨリ進ンデ標題中「ソガ社會將來ノ改良ニ及ボス影響」トシテアル部分ニ相當スル議論ノ一斑ヲ述ベヤウト思フガ、其ハ先キニ掲ゲタ議論ノ續キヲ載スレバ略ボ足ルデ有ラウ。其文句ハ即チ次ニ掲グルガ如キモノデ、人口論第一章ノ終リニ近キ所ニアル。

「此ノ如ク人口(繁盛)ノカト土地ノ(生活資料)生産ノカトガ自然的ニ不平等デアルト云フ事、及ビ吾々ノ天性ニ關スル大法則ノ爲ニ是等二個ノ力ノ結果ハ絶エズ平等ニ保タレナケレバ爲ラヌト云フ事トハ、社會完成ノ途上ニ横ハル大困難ニシテ、到底打勝ツベカラザルモノト余ハ思フ。他ノ凡テノ議論ハ之ニ比較スレバ輕ク且ツ從タルモノデアアル。余ハ凡テノ生物ヲ支配スル此法則ヨリシテ、人間ノ進レ出ヅベキ道アルヲ知ラヌ。如何ニ平等ノ制度ヲ立テ如何ニ農政上ノ諸制度ヲ設ケテ其極致ニ到ルトモ、纔ニ一世紀間タモ此法則ノ壓力ヲ除クコトハ出來ヌ。サレバ社會ノ各員凡テガ安樂ニ、幸福ニ、且ツ比較的閑暇ニ生活シ、而シテ彼等自身及ビ其家族ニ向ツテ生活資料ヲ供給スルコトニ就キ何等ノ心配ヲ感ゼザルガ如キ社會ガ成リ立チ得ルト云フ事

ハ到底望ナキコトノ如ク見ユル』。<sup>(26)</sup>

一〇、次ニ標題ノ最後ニアル『附リ、ごどめん氏、こんどるせー氏、及ビ其他ノ著作家ノ思索ニ關スル評論』ト云フ部分ニ相當スル所デハ、如何ナル議論ヲシテ居ルカト云フニ、其一斑ハ次ニ述ブルガ如クデアル。

『ごどめん氏ハ其著述ノ全體ヲ通ジテ大誤謬ノ下ニ議論ヲ上下シテ居ル。而シテ其誤謬トハ、氏ガ人生ニ於イテ生ズル所ノ罪惡及ビ貧窮ヲバ、殆ド凡テ世ノ中ノ制度ノ罪ニ歸シテ居ルト云フコトデアル。氏ノ說ニ從ヘバ、政治上ノ諸法制及ビ財産制度ノ設置ハ、凡テノ惡事ヲ盛ニ産ミ出ス源デアリ、又人類ヲ退化セシムル所ノ罪惡ノ醸成所デアル。今實際ノ事情ガ眞ニ氏ノ說ノ如クナラバ、此世界ヨリ惡事ヲ根絶スルコトハ、必シモ望ミナキコトデハアルマイ。サウシテ理性ト云フモノハ、斯カル大目的ヲ實現スル爲ニ相應ハシキ適當ナ手段デアルトモ考ヘラレル。乍併、如何セン真理ハ次ノ如クデアル。即チ縱ヒ世ノ中ノ諸制度ハ人類ノ多クノ不幸ヲ生ズル明白ナル且ツ有力ナル原因ノ如クニ見エルケレドモ、而カモ實際ニ於イテハ是等ノモノハ輕イ表面的ノ原因デアツテ、之ヲ以テ、カノ深ク人生ノ根底ニ根ザシ、カクテ人生ノ泉ヲ濁ラシ、人生ノ流レ全體ヲ濁スニ至ル所ノ原因(まるさすノ所謂人口ノ原則)ニ比アレバ、ソハ單ニ水面ニ浮ベル羽毛ノ如キモノデアル』。<sup>(27)</sup>

## 六 第一版ト第二版トノ差異(一)總說

26) 1st ed., pp. 16, 17.

27) 1st ed., pp. 176, 177.

一、以上ガ人口論第一版ノ要領デアルガ、まるさすハ此第一版ヲ公ニシタ翌年ニハ、當時英人トシテ旅行シ得ル限リノ地方、即チ獨逸、瑞典、那威、ひるらんぞ及ビ露國ノ一部ヲ巡歴シ、且其後引續キ諸書ヲ涉獵スル爲メ實ニ五ケ年ヲ費シ、其結果漸クニシテ出版シタモノガ一八〇三年ニ出ジタ所謂人口論ノ第二版ナルモノデアアル。(此第二版ニハ一八〇三年六月八日ノ日附アル序文ヲ附ス)。

まるさすノ人口論ハ既ニ一言セシ如ク前後六版ヲ出シテ居ルガ、其中前ニ述ベタ第一版ト茲ニ述ベントスル第二版トノ差異ガ最モ著イ。

先ツ之ヲ形體及ビ分量ノ上ヨリ觀察スルニ、第一版ハ八折版三百九十六頁ノ小冊子デアアルガ、第二版ハ其ニ倍ノ大サノ四折版デ頁數ハ六百四アル。從ツテ語數モ第一版ハ約五萬言デアツタモノガ、第二版ハ約二十萬言ニ殖ヘテ居ル。

次ニ第一版ハ匿名ノ著述デアツタモノガ、第二版ニハ始メテ『けむぶりつぢ、じーざす・かれつじ學僚。えー・えむ。ちー・あーる・まるさす』ト明カニ著者ノ名ヲ附シ、標題ハ『人口ノ原則ニ關スル一論』ト云フ所ダケハ第一版ト同ジデアアルガ、其後ノ方ハ全然變ツテ居ル。試ニ第二版ノ扉ヲ複寫スレバ次ノ如クデアアル。(次ノ頁ヲ見ヨ)。

之ニ依ツテ見レバ、第一版デハ『人口ノ原則ニ關スル一論』ト云フ標題ノ下ニ大キナ文字デ『ソガ社會將來ノ改良ニ及ボス影響』トシテアツタノニ、第二版デハ其ノ代リニ『ソガ人類ノ幸福ニ及ボセル過去及ビ現在ノ影響ノ觀察』ト爲ツテ居テ、『ソガ惹起スル所ノ害惡ノ將來ニ於ケル除去

AN ESSAY

ON THE

PRINCIPLE OF POPULATION;

OR,

A VIEW OF ITS PAST AND PRESENT EFFECTS

ON

HUMAN HAPPINESS;

WITH AN INQUIRY INTO OUR PROSPECTS RESPECTING THE FUTURE REMOVAL  
OR MITIGATION OF THE EVILS WHICH IT OCCASIONS.

*A NEW EDITION, VERY MUCH ENLARGED,*

By T. R. MALTHUS, A. M.

FELLOW OF JESUS COLLEGE, CAMBRIDGE.

LONDON:

PRINTED FOR J. JOHNSON, IN ST. PAUL'S CHURCH-YARD,

BY T. BENSLEY, BOLT COURT, FLEET STREET.

1803

注意 右ノ扉ノ活字ノ形及ビ大サハ殆ド原本ト同一ナレドモ、原本ハ約本誌ニ倍ノ紙幅ヲ有スルヲ以テ、字間、行間等ハ固ヨリ原本ト同シカラズ。

又ハ輕減ニ關スル吾等ノ豫想ニ就イテノ研究』ト云フコトハ其ノ附リト爲ツテ居ル。サウシテ第一版ノ標題ニ附リトシテアツタ『ごどみん氏、こんどるせー氏、及び其他ノ著作家ノ思索ニ關スル評論ト云フ文字ハ全ク取り去ラレテ居ルノデアアル。

右様ノ次第アデルカラ第一版ト第二版トデハ其編次及び内容等著シク相違シテ居ル。即チ第一版ハ全部十九章ヨリ成リ立チ別ニ篇ヲ分タザリシニ、第二版ハ全體ヲ四篇ニ分チ、更ニ第一篇ヲ十四章ニ、第二篇ヲ十一章ニ、第三篇ヲ回ク十一章ニ、第四篇ヲ十二章ニ分ツテ居テ、合計スレバ全部四十八章カラ成リ立ツテ居ル。猶其内容ノ著シク相違シテ居ルコトハ著者自身ノ認メテ居ル所デアツテ、現ニ第二版ノ序文ニハ次ノ如ク述ベテアル。

『現在ノ形ニ於イテハ、此再版ハ一ノ新著トシテ考ヘ得ラルル。……此理由ニ依リ余ハ初版ノ購買者ニ向ツテ何等ノ言譯ヲスル必要ハナイト信ズル。此再版ニ重刷セザリシ初版中ノ或部分ノモノハ、今日モ猶其價值ヲ有スト考ヘル。蓋シ余ガ之ヲ削除シタルハ、其部分ガ新タニ加ヘタル部分ヨリ凡テ價值少シト考ヘタ爲デハナクテ、只問題ヲ取扱フニ當リ余ガ新タニ採リシ別種ノ計畫ニハ適應セザルモノアルニ至リシガ爲デアアル。』<sup>(28)</sup>

『余ハ現著作ノ全體ヲ通ジ之ヲ前版ニ比スレバ其原則ニ於イテ甚シク相違シテ居ルノデアツテ、即チ本書ニ於イテハ、人口増加ノ妨ゲノ中、嚴格ニ言ハバ罪惡及び貧窮ノ何レニモ屬セザル所ノ他ノ妨ゲアルコトヲ認ムニ至ツタ。サウシテ後ノ部分ニ於イテハ、第一版中最モ烈シカリシ議論ノ或者ヲバ柔カクスルコトニ努メタ。』<sup>(29)</sup>

28) 2nd ed., V.  
29) *Ibid.*, VII.

## 七 第一版ト第二版トノ差異—(三) 議論ノ比較

一、以上述べシ所ニ依ツテ第一版ト第二版トノ差異ハ大凡ソ想像サレル筈デアルガ、以下更ニ稍々細カク其差異ノ主ナル點ヲ述ブルデ有ラウ。

第二版以後ノ人口論ノ出發點ハ『凡テノ生物ハ之ニ向ツテ備ヘラレタル食料以上ニ増殖セントスル恒常ノ傾向』<sup>(30)</sup>ヲ有スト云フ事デアアル。氏ハ第二版ノ最初ノ頁ニ『此論文ノ主タル目的ハ、人間ノ本性ト密接ニ結合シテ居ル所ノ一大原因ノ結果ニ就イテ研究セントスルニ在ル』<sup>(31)</sup>ト云ツテ居ルガ、其原因トハ即チ『凡テノ生物ハ之ニ向ツテ備ヘラレタル食料以上ニ増殖セントスル傾向ヲ有スル』ト云フ事デアアル。既ニ述べシ如ク、第一版ニハ食料ハ人間ノ生存ニ必要ナリト云コトト、人間ノ性慾ハ一定不變ノモノナリト云フコトト、先ヅ此ノ二個ノ前提ヲ掲ゲ、之ヲ出發點トシテ食物ノ増加力ト人口ノ増加力トノ比較ニ論及シ、其ヨリシテ本論ニ進ムコトニ爲ツテ居ルケレドモ、第二版デハ先ヅ一般生物ニ就キ最初カラ其繁殖力ト食物トノ關係ガ斷言シテアツテ、之ヲ出發點トシテ直ニ議論ハ本論ニ入ツテ居ルノデアアル。

併シ此ノ如キハ主トシテ説明ノ改良デアツテ、議論ノ變化トシテ重視スベキ點デハ無イ。主タル變化ハ其ヨリ以下ノ議論ニ就イテデアアル。今余ハ其議論ノ變化ヲ一見明瞭ナラシメンガ爲ニ、先キニ引用シタル第一版ノ文章ヲ重テ茲ニ掲出シ、其ノ第二版ニ於イテ變更サレシ部分ヲ書き入ルルコトトスルデ有ラウ。

30) *Ibid.*, p.2.

31) *Ibid.*, p.1.

『現ニ動物界及ビ植物界ヲ通ジテ、自然ハ生命ノ種子ヲバ極メテ豊富且自由ニ振詩ク。(凡テ重複ニ付キ此間省略ス)。カクテ植物モ動物モ其繁殖ハ此ノ制限的ノ大法則ノ下ニ萎縮シテ仕舞フ。而シテ人間ト云フ生物モ亦タ如何ニ其理性ヲ働カストモ、到底此法則ヨリ遁ル能ハザル者デアル。其結果ハ、動物ノ間ニ在ツテハ種子ノ浪費、疾病及ビ天死ト爲リ、人類ニ在ツテハ貧窮及ビ罪惡ト爲ル。(凡テ重複ニ付キ以下省略ス。全文ハ本稿一〇頁以下ノ所ニ掲ゲ。)

以上第一版ノ文章中線ヲ附セシ部分及ビ其レ以下ノ文章數節ハ凡テ第一版ニ削除セラレ、第一版ノ次ノ文章ガ直グ引續キ掲ゲラレテアル。

『植物及ビ動物ニ在ツテハ、此問題ノ觀察ハ極メテ簡單デアル。(以下重複ニ付キ省略ス。)

『此ノ妨ゲナルモノノ人ニ及ボス影響ハ一層複雑デアル。(第一版ニハ以下改行ト爲リ居レドモ、第二版ニ於イテハ然ラズ)。人間モ亦タ同ジャウニ強大ナル本能ニ依ツテ其種屬ノ増殖ヲ強キラレテ居ルケレドモ、理性ト云フモノガアツテ其行程ヲ妨ゲ、生活資料ヲ供給スルコトモ出來ヌノニ無暗ニ子ヲ産ンデ宜イモノカト云フ事ヲ考ヘサセラレルコトニ爲ル。(以下改行ニ至ル迄ノ文句第二版ニハ削除サル。)

『此ノ如キ考ヨリシテ、凡テノ文明國民ニ於ケル大多數ノ人々ハ、一人ノ婦人ト早く同棲スルト云フ自然ノ指圖ニ從フコトカラ妨ゲラル、筈デアリ、又實際妨ゲラレテ居ル。而シテ此抑制ハ絶對的ニデハナイガ、殆ド必然的ニ罪惡ヲ作り出スコトニ爲ル。(以下省略全文ハ本稿一二頁ヲ見ヨ。)

以上線ヲ附セシ部分ハ第二版ニ削除セラレ、點ヲ附セシトコロ以下ニ相當スル部分ハ次ノ如ク改メラレテ居ル。

(此處第二版ニテハ改訂ニ非ズ。先キニ掲ゲシ文句「人間モ亦々何ジャウニ強大ナル本能ニ依ツテ其種屬ノ増殖ヲ強弁ラレテ居ルケレドモ、理性ト云フモノガアツテ其行程ヲ妨ゲ、生活資料ヲ供給スルコトモ出來ヌノニ無暗ニ子ヲ産ンデ宜イモノカト云フ事ヲ考ヘサスコトニ爲ル」ト云フ處ニ續ク)「人ガ若シ此ノ自然ノ暗示ニ從ハバ、其抑制ハ極メテ屢々(第一版ニハ「絶對的ニデハナイガ殆ド必然的ニ」トアル)罪惡ヲ作り出ス。若シ又之ニ從ハズンバ、人間ハ絶エズ其生活資料以上ニ増加シヤウト努メルデ有ラウ。乍併人間ノ生活ニハ食物ヲ必要トスト云フコトハ吾々ノ天性ニ關スル法則デアルカラ、人口ハ之ヲ維持スルニ必要ナル最低限ノ食料以上ニ實際ニハ決シテ増加スルモノデ無イ。ソコデ食物獲得ノ困難ヨリ生ズル人口(増加)ノ強キ妨ゲハ、絶エズ働カザルヲ得ザルコトト爲ル。此困難ハ何所カニ落チテ來子バ爲ラヌ。サウシテ必然的ニ人類ノ多數ニ依ツテ、何等カノ形ニ於ケル貧窮又ハ貧窮ニ對スル恐怖トシテ烈シク感ゼラレ子バ爲ラヌ」<sup>(32)</sup>

まるさすハ此ノ如ク論ジ來ルコトニ依ツテ、依然人口増加ノ妨ゲトシテ罪惡ト貧窮トヲ擧ゲテ居ルノデアツテ、一見スル時ハ其議論ノ骨子ハ第一版ト第二版トノ間ニ於イテ左シタル差異ナキガ如ク見ユレドモ、只茲ニ注意スベキコトハ、第二版ニ於イテハ性慾ノ抑制ハ「極メテ屢々罪惡ヲ作り出ス」ト論ジタダケデ、第一版ニ於ケルガ如ク「絶對的ニデハナイガ殆ド必然的ニ罪惡ヲ作り出ス」ト爲シアラザル點デアル、是レ彼ガ人口増加ノ制限トシテ、貧窮及ビ罪惡ノ外ニ特ニ道德的抑制ナルモノヲ擧グルニ至ツタ所以デアツテ、畢竟人口増加ノ妨ゲニ關スル彼ノ意見ハ此點ニ於イテ最モ著シキ變化ヲ來シク譯デアル。仍ツテ以下更ニ此點ニ關スル彼ノ意見ヲ詳述スベシ。

32) 2nd ed., pp. 2, 3.

## 八 第一版ト第二版トノ差異—(三)道德的抑制

一三、人口増加ノ妨ゲヲ分ツテ豫防的ノ妨ゲ (preventive check) 及ビ積極的ノ妨ゲ (positive check) ノ二ツト爲スコトハ、既ニ第一版ニ見ハレテ居ル思想デアツテ、其説明ハ元ト次ノ如ク爲ツテ居ル。

『家族ヲ育テルコトニ伴フ困難ノ先見ハ、人口ノ自然的増加ニ對シ豫防的ノ妨ゲトシテ働ク。ソウシテ下層階級ノ人々ガ實際困窮ニ陥リ、是ガ爲メ彼等ノ子孫ニ向ツテ適當ナル食物ト注意トヲ與フル能ハザルニ至ル事情ハ、積極的ノ妨ゲトシテ働ク。』<sup>(33)</sup>

『余ガ人口ニ對スル積極的ノ妨ゲト謂フハ、既ニ始マリシ所ノ増加ヲ抑制スル所ノ妨ゲヲ意味シ、單ニトハ云ヘマイガ恐ラクハ主トシテ、社會ノ最下層ニ限ラレテ居ルモノデアアル。』<sup>(34)</sup>

猶コノ豫防的妨ゲト積極的妨ゲトガ、貧窮及ビ罪惡ト如何ナル關係ヲ有スルヤハ、次ノ文章ニ依ツテ之ヲ知ルコトヲ得ル。

『古クヨリ住ハレ居ル凡テノ國々ニ行ハルル所ノ人口ニ對スルニ二大妨ゲニシテ、余ノ名ケテ豫防的妨ゲ及ビ積極的妨ゲト爲セル所ノモノニ加フルニ、吾々ハ猶ホ婦人ニ關スル種々ノ惡慣習、大都市、健康ニ害アル諸工業、奢侈、傳染病及ビ戰爭ヲ以テスルコトヲ得。』<sup>(35)</sup>

『凡テ是等ノ妨ゲハ正ニ貧窮及ビ罪惡ノ何レカニ歸屬スルモノデアアル。』<sup>(35)</sup>

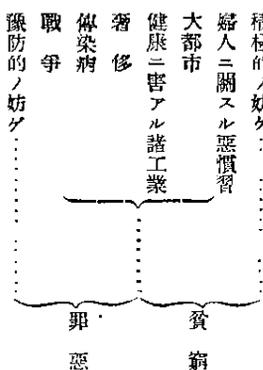
以上掲グル所ニ依ツテ考フレバ、人口増加ニ對スル各種ノ妨ゲノ關係ハ、第一版ニ於イテハ次

33) 1st ed., pp. 62, 63.

34) Ibid., p. 71.

35) Ibid., pp. 99, 100.

表ノ如ク爲ツテ居ルノデアル。



一四、然ラバ第二版ニ於イテハ、此ノ人口増加ノ妨ゲガ如何ニ取扱ツテアルカ。例ニ依ツテ先ツ原文ヲ引クデアラウ。

『人口ニ對スル妨ゲハ……之ヲ分ツテ豫防的妨ゲ及ビ積極的妨ゲノ二大項目ニ分類シ得ラル。』

『豫防的ノ妨ゲハ人間ニ特有ノモノデ、即チ人ヲシテ遠キ慮ヲ爲サシメ得ル所ノ理性ノ力ガ、人間ニハ特ニ優レテ居ルト云フコトカラ起ル。植物及ビ動物ハ彼等ノ子孫ノ將來ニ於ケル養育ニ就イテ明カニ何等ノ疑惑ヲ有タヌ。ソレ故彼等ノ無限ノ増殖ニ對スル妨ゲハ、凡テ積極的デアル。(以下人類ハ他ノ生物ト異リ、其家族數ヲ殖ヤスコトノ結果ニ就キ種々考慮スルモノナルコトヲ記ス。』

『此ノ如キ考ヨリシテ、凡テノ文明國民ニ於ケル大多數ノ人々ハ、一人ノ婦人ト早ク同棲スルト云フ自然ノ指圖ニ從フコトカラ妨ゲラルル筈デアリ、又實際妨ゲラレテ居ル。(此文句ハ其ノママ初版ニ在リ、先キニ引用ス。』

『若シ此抑制ガ、多クノ場合ニ於イテ然ルガ如ク、殊ニ中流及ビ上流ノ婦人間ニ於イテ極メテ普遍的ニ然ルガ如ク、罪惡ヲ作り出スニ至ラザルナラバ、ソハ疑ヒモナク人口ノ原則ヨリ起リ得ベキ最小ノ弊害デアル。ソハ元ト無害ニシテ且常ニ自然的ナル性<sup>インクリーション</sup>向ニ對スル抑制ナレバ、其點ヨリ考フレバ、一時多少ノ不幸ヲ生ズルモノタルコトハ之ヲ認容セネバ爲ラヌ。併シ之ヲ以テ人口ニ對スル他ノ如何ナル妨ゲヨリ生ズル弊害ニ比スルモ、ソハ明カニ輕微ナモノト謂ハチバ爲ラヌ。

『若シ此抑制ニシテ、男子ノ間ニ於イテ又多數ヲ占ムル下層階級ノ婦人ノ間ニ於イテ最モ屢々起ルガ如ク、罪惡ヲ作り出スニ至ルナラバ、之ニ伴フ弊害ハ極メテ著大デアル。』<sup>(36)</sup> (下略)

『人口ニ對スル積極的ノ妨ゲハ極メテ多樣デアツテ、其中ニハ、其ノ罪惡又ハ貧窮ノ何レヨリ起ルモノタルヲ問ハズ、何等カノ程度ニ於イテ人ヲシテ其天壽ヲ完ウセシメザル凡テノ原因ヲ含ム。サレバ此項目ノ中ニハ、健康ニ害アル凡テノ職業、過激ノ勞働及ビ寒暑ニ曝サルルコト、極端ナル貧困、不適ナル小兒ノ養育、大都會、各種ノ放蕩、普通ノ疾病ノ全部、戰爭、傳染病、疫病、及ビ飢饉等ヲ算フベキデアル。

『以上余ガ豫防的及ビ積極的妨ゲノ項目下ニ分類セシ人口増加ニ對スル是等ノ障礙ヲ吟味スル時ハ、ソハ凡テ道德的抑制、罪惡、及ビ貧窮ノ何レカニ歸屬スルモノナルコトガ分ル。

『豫防的妨ゲノ中、不正常ナル情慾<sup>イレギュラー</sup>ノ満足ヲ伴ハザルモノハ、正ニ道德的抑制ト名クベシ。(他ノ場所ニハ之ヲ解釋シテ)用心深キ動機ヨリ結婚ヲ避ケ、而カモ其期間全ク不道德ヲ行ハザルモノトシテアル。』

『亂雜ナル情交、不自然ナル情慾、私通及ビ不正常ナル情交ノ結果ヲ隱蔽スル爲ノ不當ナル方法等ハ、明カニ罪惡ノ項下ニ屬スベキモノデアアル。』

『積極的ノ妨グノ中、自然ノ法則ノ爲メ其發生ノ避クベカラザルガ如ク見ユルモノハ、一括シテ之ヲ貧窮ト名クベク、之ト異リ明カニ吾々が自ラ招ケルモノ、即チ戰爭、放蕩、其他吾々ノ力ニテ避ケ得ラル、モノハ性質ノ混合セルモノデアアル。是等ハ吾々が罪惡ニ依リ自ラ招キシモノニテ、其結果ハ貧窮ト爲ルモノデアアル。』<sup>37)</sup>

以上掲グル所ニ依ツテ考フレバ、人口増加ニ對スル各種ノ妨グノ關係ハ、第二版ニ於イテハ次表ノ如クナツテ居ルノデアアル。

積極的ノ妨グ	人力ニテ避ケ得ベカラザルモノ	.....	貧窮
.....	其結果	.....	.....
.....	人力ニテ避ケ得ラル、モノ	.....	.....
.....	其原因	.....	.....
豫防的ノ妨グ	不道德事件フモノ	.....	罪惡
.....	不道德事件ハザルモノ	.....	.....
.....	.....	.....	道德的抑制

一五、カクテ第一版ニ掲ゲラレタ二個ノ命題ハ、第二版ニハ次ノ如ク書き改メラレテ居ル。

『人口ノ増加ハ必然的ニ生活資料ニ依リテ制限セラル。』

『人口ハ、有力ニシテ且顯著ナル妨グニ依ツテ妨害サレザル限り、生活資料が増加スル時ハ何時デモ増加スル。』

『是等ノ妨グ及ビ人口ヲ抑ヘテ生活資料ト平準ヲ保タシムル所ノ妨グハ、道德的抑制、罪惡、及

37) 2nd ed., p. 11.

## 九 第一版ト第二版トノ差異——(三)立脚地ノ變化

一六、以上述べ來リシ所ニ依ツテ考フレバ、第一版ト第二版トノ間ニハ、矢張り重大ナル差異アルコトガ分ル。即チ所謂人口ノ原則ノ爲ニ、人口ノ自然的増加ガ、如何ナル社會如何ナル時代ニ於イテモ常ニ妨ゲラレテ居ルト云フコトハ、第一版ノ所論モ第二版ノ所論モ全ク同一デアルガ、只ダ第一版ニ於イテハ其ノ人口増加ノ妨ゲナルモノハ、罪惡カ貧窮カ何レニシテモ好マシカラザル結果ヲバ必ズ齎スモノトサレタルニ、第二版ニ於イテハ、罪惡ニモ貧窮ニモ屬セザル道德的抑制ナルモノガ認めラレテ居テ、人口ノ増加ヲ抑制スルモノハ必シモ罪惡ト貧窮ニ限ルモノニ非ズトサレテ居ルノハ、之ハ非常ナル見解ノ相違デアアル。

今余ハ此ノ如キ見解ノ相違ヲ生ズルニ至リシ原因ヲ以テ、まるさすガ物的人世觀ヨリ心的人世觀ニ近寄リシガ爲ナリト信ズル。竊ニ思フニ余ガ此見解ニ就イテハ恐ク異論アルヲ免レザルベク、而カモ其等ノ異論ニ應ズル爲ニハ別ニ長篇ヲ要スルコト故、到底茲ニ之ヲ詳論スルノ餘白ナケレドモ、只吾々ガ物の觀察ヲ探レバ世ノ中ノ見方ガドウナリ、心の觀察ヲ探レバ其カドウ變ルカト云フコトニ就キ、まるさすノ人口論ハ如何ニモ興味アリ且適切ナル一例ト爲リ居ルガ故ニ、余ハ簡單ナガラモ此點ニ就キ一言セズシテ篇ヲ終ル譯ニハ行カヌノデアアル。

一七、まるさすハ最初第一版ニ於イテハ甚シク物的人世觀ニ傾イテ居タ。(絶對的ノ唯物觀ヲ探

ツテ居タトハ云ハヌ)。然ルニ第二版以下ニ於イテハ、次第々々ニ心的人世觀ノ方ニ近寄ツテ來テ居ルノデアル。今其結果トシテ起リシ最モ主ナル事實ハ、氏ガ人間ノ理性ノ働キヲ次第ニ重ク見從ツテ人間ノ自己制御ノ能力ヲバ次第ニ強ク見ルニ至ツタコトデアル。此ノ如キ態度ノ變化ハ第一版ヨリ第二版ニ移ル間ニ於イテ特ニ甚シイ。而シテ第一版ニ於イテハ殆ド無視サレシカノ『道德的抑制』ナルモノガ、第二版以下ニ於イテハ貧窮及ビ罪惡ト共ニ人口増加ノ三大妨ゲノ一トサルルニ至リシハ、即チ其ガ爲デアル。

第一版ニ於イテモなるさすハ決シテ理性ナルモノヲ全然認メナカッタ譯デハ無イ。人間モ亦同ジヤウニ強力ナル本能ニ依ツテ其種屬ノ増殖ヲ強キラレテ居ルケレドモ、理性ト云フモノガアツテ其行程ヲ妨ゲ<sup>(39)</sup>云々ト論ジテ居ルガ如キハ、即チ其一例デアル。併シ結婚延期ノ爲ニ生ズル結果ニ就イテハ、第一版ト第二版トデハ、其觀察ガ次ノ如ク相違シテ居ル。即チ第一版ニテハ

This restraint almost necessarily, though not absolutely so, produces vice. <sup>(40)</sup>  
トアルケレドモ、第二版デハ

The restriction too frequently produces vice. <sup>(41)</sup>

ト爲ツテ居ル。almost necessarily が too frequently ニ變ツテ居ルノハ、小サイ變化ノヤウデ實ハ大ナル變化デアル。第一版ニ於イテモ『殆ド必然ニ』ト云ツテ居ツテ『絶對的必然ニ』トハ云ツテナイカラ、此點ニ於イテ多少ナリトモ道德的抑制ヲ認ムルノ餘地ハアツタノダケレドモ、併シ其ガ殆ド全ク無視サレテ仕舞ツテ居ル。然ルニ第二版ニナルト、此點ニ關シテモ氏ハ人間ノ理性ノ働

39) 1st ed., p. 24.  
40) 1st ed., p. 29.  
41) 2nd ed., p. 3.

キヲ認メ其意識ノ自由ヲ認メテ居ルガ爲ニ(ソレダケ心の觀察ニ近寄ツテ來タ爲ニ)、第一版ニ於ケルガ如ク結婚延期ノ結果人々ハ『必然ニ』罪惡ニ陥ルコトナク、自己制御ノ力ニ依リテ罪惡ト道德的抑制トヲ選擇スルノ自由ヲ得ルコトニ爲ツテ居ルノデアル。

一八、人世ノ物的觀察トハ、人間ヲ物質トシテ觀ルコトデアルカラ、吾々ハ此見方ニ近寄レバ近寄ルホド、之ヲ同ジ生物ニ就イテ云ヘバ、人間ト動植物トノ差異ガ次第ニ見エナクナツテ來ル筈デアルガ、此點カラ見テモ、些細ナ文句ノ末ニ迄、まるさすノ態度ノ變遷ガ能ク分ル。

例ヘバ第一版及ビ第二版ニハ

In plants and animals the view of the subject is simple (42)

トアルガ、コトナ簡單ナ文句ニデモ、第三版ニナルト『動物』ノ上ヘ『不合理的ナル』ト云フ形容詞ヲ附ケテ In plants and irrational animals 云々ト改メ、動物ト合理的ナル人間トヲ明カニ區別セんとスルノ形跡ガ見ハレテ居ル。

又第二版ノ豫防的ノ妨ゲニ關スル説明ヲ見ルニ、次ニ掲グル如ク(譯文ハ前ニ掲グ其ニハ甚シク人間ノ理性ヲ高調シテアルガ、此ノ如キハ第一版ニ於イテ見ザリシ所デアル)。

The preventive check, is peculiar to man, and arises from that distinctive superiority in his reasoning faculties..... Plants and animals have apparently no doubts about the future support of their offspring. The checks to their indefinite increase, therefore, are all positive. (43)

然ルニ第三版ニナルト、更ニ此文章ニ訂正ヲ加ヘ、人ト他ノ生物トノ間ニ自發的ノ働キアルト否ト

42) 1st ed., p. 27. 2nd ed., p. 2.  
43) 3rd ed., p. 3.  
44) 2nd ed., p. 9.

ノ別ヲ設ケ、又動物ト云フ名詞ノ上ニハ特ニ非合理的ナル形容詞ヲ附加シナドシテアル。今其ノ新タニ挿入サレシ部分ヲいたりつくニテ書キ示サバ、第二版以下ノ文句ハ次ノ如ク變ハツテ居ル。

The preventive check, *as far as it is voluntary*, is peculiar to man,..... The checks to the indefinite increase of plants and irrational animals are all either positive, or, if preventive, involuntary. (45)

一九、扱テまるまゝ第二版以下ニ於イテ人間ノ理性ノ働キヲバ比較的重視シテ來タ爲ニ、人口増加ノ妨ゲニ就イテモ、貧窮及ビ罪惡ノ外ニ、一者ノ何レニモ屬セザル道德的抑制ナルモノヲ認ムルニ至ツタノデアルガ、既ニ貧窮及ビ罪惡ノ外ニ此ノ如キ人口増加ノ妨ゲアルコトヲ認メシカ、縦ヒ人口増加ノ妨ゲハ氏ノ所謂人口ノ原則ニ依リ到底避クベカラザルモノトアルモ、少クトモ貧窮及ビ罪惡ハ理性ノ力ニ依リテ之ヲ避ケ得ルコト爲ル。此ノ如クニシテ、氏ノ第一版ニ於ケル議論ハ物的人世觀ニ逆ズル特徴トシテ甚シク悲觀的色彩ヲ帶ビテ居タノデアアルガ、第二版以下ニ於イテハ其悲觀的色彩ガ次第ニ薄ライデ來テ居ル。

試ニ第一版ノ終リヲ見ヨ。ソコニハ次ニホスガ如キ冷酷ナル調子ノ悲觀說ガ頻リニ述ベテアル。『惡 (Evil) ハ人ヲシテ活動セシムル爲ニ必要デアル。』<sup>(46)</sup>

『餘裕ハ疑ヒモナク人ニトツテ極メテ價値アルモノデアル。乍併、之ヲ人間ノ實際ニ就イテ考フレバ、多數ノ場合ニ於イテ、餘裕ハ善ヲ生ズルヨリモ寧ロ惡ヲ生ズルノガ有リ勝チノコトデアルガ如ク見ユル。』<sup>(47)</sup>

45) 3rd ed., p. 19.

46) 1st ed., p. 360.

47) 1st ed., p. 370.

罪惡ヤ貧窮ハ畜ニ人生ニ於イテ根絶シ得ベカラザルモノタルノミナラズ、人生ノ爲ニ必要ダト云フノデアアルカラ、罪惡乃至貧窮ヲ此人生ヨリ根絶セント希望セル人々ニトツテハ、之ハ甚シキ悲觀論ダト謂ハチバ爲ラス。第一版ニ於イテハ此ノ如キ悲觀論ヲ吐イタ著者ガ、第二版ノ最終ノ頁ニ於イテハ、實ニ次ノ如ク述ベテ居ル。

It is hoped that the general result of the inquiry is such, as not to make us give up the cause of the improvements of human society in despair. (38)

此ノ如ク人口論全體ノ結論ガ、社會ノ改良ハ絶望テハ無イト云フコトニ爲ツタノデアアル。ンコテ最初ハ専ラゴゐん等ノ理想社會論ヲ攻撃スル爲ニ著サレタ氏ノ人口論ハ、第二版以下ニ於イテハ殆ド其攻撃ノ的ヲ失ツテ仕舞ツタノデ、現ニ初版ノ標題ニハ With Remarks on the speculation of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers ト云フ文字ガアツタノニ、第二版以下デハ全部削ラレテ仕舞ツテ居ル。ンウンテ第一版ニ於イテハ單ニゴゐんノ説ヲ非難スル爲ダケニ、全部一十九章中約六章ヲ割イテ居テ、其目次ハ現ニ次ノ如クナツテ居ルケレドモ、

Chap. X. Mr. Godwin's system of equality. — etc, etc.

Chap. XI. Mr. Godwin's conjecture concerning the future extinction of the passion between the sexes. — etc, etc.

Chap. XII. Mr. Godwin's conjecture concerning the indefinite prolongation of human life. — etc, etc.

Chap. XIII. Error of Mr. Godwin in considering man too much in the light of a being merely rational. — etc, etc.

Chap. XIV. Mr. Godwin's five propositions respecting political truth, on which his whole work hinges, not established. — etc, etc.

Chap. XV. Models too perfect may sometimes rather impede than promote improvement. — etc, etc.

第二版ニハ全部四十八章中ごどみんノ所説ノ批評ニ充テラレタモノハ僅ニ第三篇中ノ二章即チ

Chap. II. Of the systems of equality. Godwin.

Chap. III. Observations on the reply of Mr. Godwin.

ニ過ギナイコトニ爲ツテ居ル。

カクテ氏ノ議論ノ中心ハ第一版デハ將來ニアツタモノガ、第二版以後ハ過去及ビ現在ニ移リ、從ツテ第一版發行以後ニ於ケル氏ガ一生ノ努力ハ、各國各時代ヲ通ジテノ歴史及ビ統計ノ歸納的研究ト爲ツタ譯デ、現ニ第一版ノ標題ニアツタ The Future Improvement, etc. ノ文字ガ、第二版以後改マツテ Past and Present Effects, etc. ト爲ツテ居ルノモ決シテ偶然デハ無イ。

## 10 第三版以下第六版

二〇、扱テ以上述べタル所ハ主トシテ第一版ト第二版トノ相違デアルガ、コノ人口論ハ其後まゐるさすノ生時ニ於イテ第六版マデ出版サレテ居ル。即チ

第三版 一八〇六年發行。新タニ序文ヲ加フ。序文ニ日附ナシ。始メテ附録ヲ加ヘ、反對論ニ對スル答辯ヲ爲ス。全二卷。

第一卷五〇五頁、第二卷附録トモ五五九頁。兩卷ノ索引ハ第一卷ノ卷末ニ附ス。

第四版 一八〇七年發行。全二卷。第一卷五八〇頁、第二卷附録トモ四八四頁。第二卷ノ末ニ索引ヲ附ス。

第五版 一八一七年發行。新タニ一八一七年六月七日ノ日附アル序文ヲ添フ。全三卷。第一卷四九六頁、第二卷五〇七頁、

第三卷附録トモ四二八頁。第三卷ノ末ニ索引ヲ添フ。

第六版 一八二六年發行。更ニ新タニ一八二六年一月二日ノ日附アル序文ヲ加フ。全三卷。第一卷五三五頁、第二卷附録ト

モ四九八頁。索引ヲ第二卷ノ卷末ニ附ス。

右ノ外、第七版、(一八七二年出版)第八版、第九版(一八八八年出版)等アレドモ、ソハ皆第六版ノ重刷ニ屬スルモノデアアル。

今此第六版ヲ以テ第二版ニ比較スルニ、語數ハ約二十萬言ヨリ約二十五萬言ニ増加シテ居テ、其材料ハ益々豊富ニナツテ居ルケレドモ、生存權ニ關スル意見ノ變化ヲ除カバ、(註)議論ノ骨子ニハ別ニ左シタル變化ハナイ。仍ツテ今一々各版ノ差異ヲ列擧スルコトヲ略スル。(註)

(註)第二版、第三版トノ間ニ於ケル顯著ナル變化ハ、福田博士ノ指摘サレタル如ク、第二版ニアツタ『財産ナキモノノ生存ノ權利ナキハ、宴會ニ招カレザル賓客ノ座ニ着クノ權利ナキニ等シ』云々ト云フ一項ガ、第三版ニ至ツテ削除サレタユトデアアル。

(註)人口増加ノ妨ゲノ分類ニ關スル變化ニ就イテハ、拙稿『まるさす人口論初版以下各版ノ差異』ノ第五節『再版以下第六版ニ至ル迄ノ變化』ヲ參照セラレタシ。

## 一一 まるさす人口論ノ學問上ノ地位

一一、以上ヲ以テ不完全ナガラまるさす人口論ノ要領ヲ終リ、最後ニ其ノ學問上ノ地位ニ就キ一言ヲ費シテ此稿ヲ終ルデ有ラウ。

嘗テ A. von Mikowski ハ『經濟思想ニハ二大系統アリテ之ヲ二部ニ綜合スルコトヲ得。其一ハ富ノ哲學ニシテ、其二ハ即チ貧ノ哲學ナリ』ト云ツタト云フコトデアアルガ、カノあだむ・すみすノ大著『富ノ性質及ビ原因ニ關スル研究』ヲ以テ若シ前者ニ相當ストセバ、まるさすノ人口論ハ正ニ後者ニ屬スルモノデ、或ハ名ケテ『貧ノ性質及ビ原因ニ關スル研究』ト謂ツテモ可イノ

49) 2nd ed., p.531. 3rd ed., vol. II., p. 382.  
50) 經濟論叢第一卷(第二號)二八六頁以下

デア。而シテ若シ假ニあだむ・すみすヲ以テ英國ニ於ケル富ノ哲學ノ祖先ナリトスル人ガアルナラバ、余ハまるさすヲ以テ英國ニ於ケル貧ノ哲學ノ祖先ト爲スニ躊躇セヌデ有ラウ。思フニ此ノ二個ノ著述ハ、其ノ公刊ノ年代相距ルコト纔ニ二十三年ニ過ギザレドモ、此間ニ於イテ英國ノ經濟狀態ニハ、前後甚シキ差異ヲ呈シテ居ルノデア。今余ハ茲ニ其仔細ヲ述ブル餘白ヲ有セザレドモ、此點ヨリ云ヘバ、第十八世紀ノ最後ノ四半期ニ於イテ、前ニすみすノ富ノ哲學出デ、後ニまるさすノ貧ノ哲學出デタルコトハ、一ハ時代ノ影響ト言フテ差支ナキ事情モアル。ソハ兎モ角、余ハ貧困學創始ノ一大天才トシテ、茲ニ氏ニ向ツテ謹シテ感謝ノ意ヲ表スルモノデア。

二三 まるさすガ十八世紀末ニカノ人口論ヲ著スニ至ツタノハ、既ニ述ベシ如ク、或意味ニ於イテハ時代ノ影響ヲ蒙ツタモノト言ツテモ差支ハナイガ、其ノ直接ノ原因ハ、ごどみん、こんどるせー等ノ著述ノ刺激デア。ごどみんハまるさすニ先ツコト十事、一七五六年三月三日英國けむぶりつお州ニ生レタ思想家デアツテ、其著 *An Inquiry concerning Political Justice* ハまるさすノ人口論第一版ニ先ヅコト五年、一七九三年二月ニ公ニサレ、(其再版ハ一七九六年ニ出デ、三版ハ人口論第一版ト同ジク一七九八年ニ出タモノデア) 其ノ *The Inquirer: Reflections on Education, Manners, and Literature, in a series of Essays* ハまるさすノ人口論ノ第一版ノ出デタル前年即チ一八九七年ニ公ニサレタモノデア。彼ガ是等書中ニ於イテ論ジタル所ハ、之ヲ一言ニシテ云ハバ、極端ナル絶對的ノ心的個人主義ニシテ、彼ハ最モ人間ノ理性ヲ重ンジ、其理性ノ力ニ依ツテ個人ハ理想的ニ完成セラレ、社會モ亦完全ナル調和ヲ保テ、罪惡及ビ貧窮ノ如キハ全然社會ヨリ其跡ヲ絶ツモノナル

51) "The Essay on the Principle of Population, which I published in 1798, was suggested, as is expressed in the preface, by a paper in Mr. Godwin's *Inquirer*."—Malthus's own preface to the second edition.

コトヲ信ジ、從ツテ國家ノ權力、法律ノ威力ニ依ツテ個人ノ自由ヲ束縛スルコトニ反對シ、又理想  
 社會ノ實現ニ對スル自然界及ビ物質界ノ妨ゲハ凡テ理智ノ力ニ依ツテ無限ニ制御セラレ得ルモノ  
 ト爲シ、而シテ人口増加ガ其理想社會ノ實現ヲ妨ゲズヤトノ非難ニ對シテハ、氏ハ人口ノ増加モ亦  
 全ク智力ニ依ツテ左右シ得ベキモノニテ、將來若シ人口ノ増加ヲ不要トスルノ時期ニ至ラバ、人  
 々ハ生殖ヲ廢シテ其ノ代リニ各人一同ガ何レモ不死ノ長壽ヲ保ツニ至ベント主張シタモノデア  
 ル。  
 一 此ノ如キ思想ハ、今日デハ或ハ之ヲ一笑ニ附シ去ル人モ多イデアラウガ、當時ハ佛蘭西革命ト  
 云フガ如キ未曾有ノ大革命ヲ斷行シ得タホドニ、世人一般ガ理想ニ燃エテ居タ時代デア  
 ルカラ、  
 『氏ノ『政治上ノ正義』ノ如キハ其ノ一タビ出ヅルヤ社會ノ各方面ニ於イテ非常ナル歡迎ヲ受ケ、當  
 時ノ思想界ニ及ボシタ影響ハ實ニ顯著ナルモノデアツタ。うな一づらな一オハ當時學生ニ向ツテ  
 『化學ノ本ハ燒キ棄テテ先ヅごゐんノ著書ヲ讀メ』ト云ツタト云フコトデア  
 ル。此書物ガ樞密  
 院デ問題ニ爲ツタ時、びつとハ『二ぎに一(三十餘圓)ノ本ハ三ゑりんぐノ金ヲモ殘シ得ヌ連中ニ  
 ハ何程ノ害モ與ヘハシナイ』ト云ツタト云フガ、併シ實際ニハ『勞働者等ハ其貯金ヲ集メテ此書ヲ  
 買ヒ、木蔭又ハ酒場デ之ニ讀ミ耽ツタ』ト云フコトデア  
 ル。<sup>52)</sup>  
 此ノ如クごゐんノ著書ハ社會ニ非常ナ影響ヲ與ヘタモノデア  
 ルガ、之ニ一年後レテ佛國デハ  
 こんごるせーノ *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain* ガ公ニサレタガ、  
 是レ亦ごゐんノ著述ト殆ド同ジ性質ノモノデア  
 ツタ。然ルニまるさすノ父ノでにえる・まるさ  
 すハ是等ノ著書ノ愛讀者デア  
 ツテ專ラ其說ニ心醉シテ居  
 タノデア  
 ルガ、一時代ホド新ラシク生シ

52) Salt, Introductory note to "Political Justice" = 據ル。

53) Jenker, Anarchism, 1898. p.16.

天子ノろばーど・どーます・なるさすノ方ハ、大ニ父ノ意見ニ反對シ、家庭内ニ於イテ互ニ議論ヲ上下シテ居タノデアルガ、其議論ヲバ遂ニ匿名デ世ニ公ニシタノガ即チ有名ナル人口論ノ第一版デアル。之ニ依ツテ見レバ、人口論ノ出來タ近因ハ、ごどゐん等ノ思想ノ刺激ニ在ルト謂ハネバ爲ラス。而シテ斯カル思想史ノ方面ヨリ云ハバ、まるさすノ人口論ハ、畢竟るーそろニ依ツテ代表サレ、佛蘭西革命ニ爆發スルニ至ツタ所ノ第十八世紀ノ思辨的樂天觀ノ沸湯ニ一杯ノ冷水ヲ注イダモノト見ルベキデアツテ、氏ハ萬人ノ血ヲ沸カシタル理想ニ對シ、冷酷ナル一ノ自然法則ヲ持チ來リ、理想社會ノ幻覺ヲ打チ壞サント試ミタモノデアアル。氏ハ理性ニ代ユルニ本能ヲ以テシ、理想ニ代ユルニ法則ヲ以テシ、唯心觀ニ代ユルニ唯物觀ヲ以テシタルモノデアアル。

二三、若シ夫レ此ノ第十八世紀ノ唯心的理想論ノ沸湯ニまるさすノ注イタ冷水ガ、流レ流レテ計ラズモ先ヅだゝゐん、うゐれーす等ノ冷酷ナル進化論的思潮ヲ生ムノ源ト爲リ、餘波更ニ經濟學界ニ逆流シテ遂ニまるくすノ唯物史觀ヲ生ムニ至リシガ如キハ、偶々以テ學界ノ一奇縁ト爲スベキモノデ有ラウ。不思議ニモまるさすノ人口論ハだゝゐん及びろをれーすノ兩人ガ共ニ其進化論ヲ思ヒ付クニ至ツタ因縁ト爲ツタモノデ、例ヘバだゝゐんハ其『種之起源』ノ中ニ次ノ如ク述べテ居ル。

If (Darwin's own doctrine) is the doctrine of Malthus applied with manifold force to the whole animal and vegetable kingdoms, for in this case there can be no artificial increase of food and no prudential restraint from marriage. (43)

又彼ノ自傳ニモ次ノ如ク記シテアル。

54) Origin of Species, Chap. III. Popular ed., p. 50. R. P. A. cheap reprints, p. 33, a.

In October, 1838, that is, fifteen months after I had begun my systematic inquiry, I happened to read for amusement "Malthus on Population,"..... Here, then, I had at last got a theory by which to work. (55)

又うをれしす方えし。此ゆゑとんニ與へタル事簡(一八八七年十二月二日ノ日附アルモノ)中ニ  
次ノ如キ文字ガアル。

The most interesting coincidence in the matter, I think, is, that I, *as well as Darwin*, was led to the theory itself through Malthus—in my case it was his elaborate account of the action of "preventive checks" in keeping down the population of savage races to a tolerably fixed but scanty number. This had strongly impressed me, and it suddenly flashed upon me that all animals are necessarily thus kept down—"the struggle for existence"—while variations, on which I was always thinking, must necessarily often be beneficial, and would then cause those varieties to increase while the injurious variations diminished..... I was lying on my bed in the hot fit of intermittent fever, when the idea suddenly came to me. I thought it almost all out before the fit was over, and the moment I got up began to write it down, and I believe, finished the first draft the next day. (56)

之ニ依ツテ見レバ、だゝゝん等ノ進化論ガまるさすノ人口論ニ負フ所アルハ明カデアアル。若シ  
夫レ進化論ナルモノガ其後諸般ノ科學ニ及ボセシ甚大ノ影響ニ至ツテハ、茲ニ繰説スルノ必要ハ  
アルマイ。氏ノ人口論ハ、人口問題以外ニ及ボシタ是等ノ影響ノミニ就イテ云フモ、實ニ偉大ナ  
モノガアル。余ハ此點ニ於イテモ、學界ノ一大恩人トシテ茲ニ謹ンテ氏ニ向ツテ感謝ノ意ヲ表セ  
ントスル者デアアル。即チ念ざげ<sup>(57)</sup>ガ其著書ノ最尾ニ掲ゲシ一句ヲ借リテ、氏ヲ頌スルノ辭ニ代  
ヘ以テ本篇ヲ終フ。

So sind wir denn berechtigt, in Malthus einen der grossen Anreger und Bahnbrecher der Wissenschaft zu erblicken, der würdig ist, neben einem Quesnay, einem Adam Smith, einem Ricardo und einem Carl Marx als einer der volkswirtschaftlichen Denker allerersten Ranges genant zu werden und im Gedächtniss der Nachwelt fortzuleben.

55) Life and Letter of Charles Darwin, 2nd ed., 1887, vol. I., p. 83. Charles Darwin: His Life told in an Autobiographical Chapter, and in a Selected Series of his Published Letters. Ed. by Francis Darwin, 1902, p. 40.  
56) 第一冊四田アル所ノ一節ハ1880年一月發行ノThe Quarterly Review, vol. 166, p. 111.

(附言)以上全文ノ植字終ルノ後、茲ニ一頁ノ餘白ヲ生ズルニ至リタレバ、本文五頁ノ(註一)ニ一書シ置キタル所ナ、左ニ少シク補説シ置クベシ。

まるさすガ食物ノ増加ト比較シタモノハ、人口ノ『自然的増加』デアル。即チ人口ガ『全ク自由ニ』其増加力ヲ發揮シタ場合、更ニ婉言セバ、人口ノ増加ガ『何等ノ妨ゲヲ受ケザリシ場合』ノコトデアル。

然ラバ其ノ所謂人口ノ自然的増加トハ何ノ事デアルカ、人口ガ自由ニ其増加力ヲ發揮シタ場合トハ如何ナル場合デアルカト云フニ、其ハ能ク分ラヌケレドモ、余ハ之ヲ解釋シテ『人間ヲバ出來得ル限り生殖ニ都合好キ状態ノ下ニ置キ、出來ルダケ子ヲ産マシテ、其子ガ又出來ルダケ能ク育ツタ場合』ト云フ位ノ意味デアルト思フ。

從フテまるさすノ意見ニ依レバ、人口ハ舊テ其自然的増加ヲ爲シタコトハ無イ、如何ナル時代如何ナル社會ニ於イテモ必ず何等カノ妨ゲヲ受ケテ居ルト云フノデアツテ、其等ノコトハ人口論中次ニ掲グル氏ノ言葉ニ依ツテ明瞭デアル。

『吾々ハ、若シ人口(ノ繁殖力)ガ完全ナル自由ヲ以テ働イタナラバ、其自然的増加ハドウデアラウト云フコトヲ確メント勉ムル者デアル。』<sup>(1)</sup>

『吾々ノ知レル限りニ於イテハ如何ナル國ニ於イテモ、人口(繁殖)ノ力ハ完全ナル自由ヲ以テ働クガママニ置カレタコトハ無イ。』<sup>(2)</sup>

『人口ハ、若シ妨ゲラレズバ、每二十五年ヲ以テ倍加ス、即チ幾何的比例ヲ以テ増加ス。』<sup>(3)</sup>

『吾々ノ觀察ニ入り來ル所ノ如何ナル社會ニ於イテモ其ノ實際ノ状態ニ於イテハ、人口ノ自然的増加ハ絶エズ且有力ニ妨ゲラレテ居ル。』<sup>(4)</sup>

多クノ論著ニハ人口ノ増加ノ妨ゲガ近キ將來ニ於イテ起ルヲ免レズト云フコトヲ、まるさすガ豫言又ハ警告シタルカニ述ベテアルガ、其ハ間違ヒデアル。

1) Ward, Lock & Co's ed., p. 3.

2) *Ibid.*, p. 3.

3) *Ibid.*, p. 4.